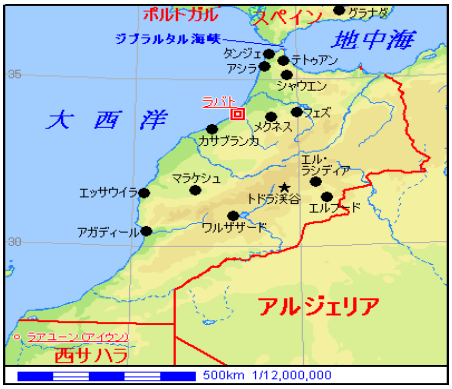
モロッコ王国への旅

رحلة إلى المملكة
المغربية

2013 年 1 月 31 日～2 月 8 日

編集　キンキンツーリスト

モロッコとは



「モロッコ」は「日の没する地の王国」で「日の出ずる国、日本」の対極にある北アフリカ北西部に位置する立憲君主国。なお、この地域のアフリカ諸国・リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコをマグリブ（日の没する所）の国と呼ぶ。

モロッコは東にアルジェリア、北にジブラルタル海峡を挟んでスペインと接し北側は地中海、西側は大西洋、南側はサハラ砂漠に面しており、その面積は日本の約１，２倍、人口は約3,200 万人。近年砂漠化の進行が顕著で、その対策として大規模な植林に取り組んでいる。アラビア語とベルベル語が公用語で、フランス語が第２言語として教えられ、スペイン語ともども良く通じる。

モロッコは、地中海世界とアラブ世界の一員であり、アラブ連盟やアラブ・マグリブ連合に加盟しているが、西サハラは自国の一部として、サハラ・アラブ民主共和国を承認せず、そのアフリカ統一機構加盟に反対して同機構を 1984 年に脱退している。

イスラム世界とは

イスラム教が誕生したのは７世紀の初めアラビアのメッカを中心とした地域であったが、その教えは聖典クルアーンに詳しく示されている。その根幹は「６信と５行」すなわち６つの信仰箇条と５つの信仰行為から成り立っている。６信とは神、天使、啓典、預言者、来世、定命の６つであり、ムスリム（イスラムを信じている人々）達は必ず証人の前で「アッラーのほかに神はない」「ムハンマドはアッラーの使徒なり」との信仰告白を行うこととされている。また、５行とは信仰告白、１日５回の礼拝、喜捨、断食、メッカへの巡礼の５つであるが、このような行為を集団で行うことによりお互いの絆を認識し一体感を高めている。

イスラムの旗のもと短い期間でペルシャ、インド、アフリカ北部、スペイン、フランス南部までの大帝国を築き上げ、現在 14 億人のムスリムがいると推定されている。そして、中国の紙やインドの数字（アラビア数字と命名された）をヨーロッパに伝え、化学薬品や羅針盤等もヨーロッパに伝えた。しかし、第１次大戦後はこれらの地域の多くはヨーロッパ列強の支配下に入りその植民地等になった。第２次大戦後、次々と独立を勝ち取り、また、2011 年の「アラブの春」の民主化の戦いの中で新たな発展を目指している。

ムスリムはイスラムの教えに基づき社会の公正を実現し、不正を否定し、生活の品行を保ち、欲望を抑え、あるべき社会の秩序を実現しようとするが、それは、個人の信条や日常生活にとどまらず、政治の在り方にまで及んでおり信仰の共同体と国家が同一という「政教一元論」に立っている。

モロッコにアラブ人が到来したのは７世紀から８世紀にかけてで、イスラム教と優れた軍事力の下、ベルベル人のイスラム化を進めアラビア語も普及していった。モロッコ最初のイスラム王朝はフェズを首都とするイドリス朝（788～926 年）であるが、その後、ムラービト王朝、ムワッヒド王朝等ベルベル人の王朝が続き 1666 年に興ったアラウイー朝が今日の王室に継承されている。1961 年にイスラム教を国教と定めたがスンニ派が９９％で穏健で、あまり戒律にこだわらない。

８世紀以降は、条件の良い平野部を中心にアラブ人が暮らし、アトラス山脈地域の住民の大半が昔から住んでいた遊牧民ベルベル人である。国民の三分の二がアラブ人、三分の一がベルベル人といわ

れているが共に熱心なムスリムである。実際には両者の混血が進んでおり、政府は、あくまでも共にモロッコ人であるとの立場から民族ごとの統計はとっていない。

モロッコ王国とは

17 世紀にモロッコを統一したムーレイ・ラシッドはアラウイー朝（首都メクネス）を興し、１９世紀初頭までヨーロッパ列強と伍して巨大な力を持っていた。しかし、その後 1830 年にフランスがアルジェリアを占領、1912 年にはモロッコもフランスの保護国（首都をラバトに移す）となり、北部地方はスペインの支配下に置かれるなどヨーロッパ列強の標的となった。1930 年代になると独立運動が盛んになり、第二次世界大戦後の 1956 年にスルターンのベン・ユーゼフがフランスからの独立を勝ち取り、ムハンマド５世（アラウイー朝第 13 代）を名乗り、新国家建設に取り組み、その死後、ハッサン２世は 1962 年に憲法を制定、君主の権限の強い立憲君主制国家として２院制の国会を開いた。

現国王ムハンマド６世は、前国王の後をついで 1999 年に即位した。民間人の女性と結婚し、一夫一婦制をとるなどその開明的姿勢には国民の信頼も厚い。現国王は貧困撲滅、失業・雇用問題や教育問題など国民に軸足を置いた政策を重視、2011 年には、国王の権限を縮小し、首相の権限を強めるための憲法改正を行った。そして、今「ビジョン 2020」を定め、国内経済の中心に観光業を据え、昨年約 934 万人の外国人観光客（同じ年で、日本への観光客は 622 万人）を 2020 年までに倍加させるとして観光地の整備・開発、人材育成などに力を入れている。また若者が多い国であり（14 才未満が 38%、平均寿命 71 才）、７年間の義務教育は無償、授業はアラビア語やフランス語で行われるが就学率は低く、非識字率は約 50%（農村の女性は 90%）と課題も大きい。

第１日目と２日目＜１月３１日(木)、２月１日（金）晴れ＞

今回は、阪急トラピックスの「モロッコ９日間モニターツアー」に参加した。私たちのグループは 11 人であったが総勢 27 人のツアーで、1 月 31 日（木）午後 10 時 30 分に添乗員の長澤富美雄さんとカタール航空のＢ777 に搭乗、カタールのドーハ空港めざして飛び立った。長澤さんはエジプトに 30 回、トルコに 40 回と年の３分の２を海外で暮らすベテランの添乗員で、モロッコは 10 回目とのことであった。落ち着いた丁寧なお世話には、みんな心から感謝していた。ドーハでＡ330 に乗り換え、チェニス経由でモロッコの玄関口カサブランカのムハンマド５世空港に１日の午後に到着、約 22 時間の飛行時間、約５時間の乗り換え待ち時間、合わせて 27 時間の狭い空間での移動はなかなかきついものであった。添乗員の話では国営カタール航空は、いま最も設備の整った航空機を持ち、サービスも最高レベルの航空会社とのことであった。

空港で現地ガイドのマダニ・ネッケスさんが出迎えてくれ、バスで首都ラバトに向かう。マダニさんは、モロッコではただ一人の日本語公式ガイドで、バスの中や観光地では、ワイヤレスマイクで、旅の最後まで案内してくれた。彼は、ほとんど独学で日本語を学び、国の公式ガイドの試験ではトップの成績であったため日本のＪＩＣＡ（独立行政法人　国際協力機構）が、彼を二週間の日本旅行に招待してくれたとのことであった。ホテルでは早速ウエルカムミントティーで歓迎を受け（この歓迎は、その後宿泊する全てのホテルで受けた）バイキングの夕食後、長旅の疲れで早々にベッドへ。

第３日目＜２月３日（土）晴れ＞

首都ラバトは、現国王ムハンマド６世の王宮もある落ち着いたたたずまいの人口 120 万の近代都市。10 世紀にベルベル人が住み始め、商業貿易の中心地として栄え、1912 年にモロッコがフランスの保護国となった時からフェズに代わって首都となる。

早朝のアザーン（モスクから流れる礼拝時間を知らせる呼びかけ）に目覚める。朝食後、最初に訪ねたハッサンの塔は、ベルベル人のイスラム王朝ムワッヒド朝＜1130～1269 年＞が、リビアからスペインまでの最大版図を形成した時代に建設されたもの。早朝の青空にそびえる４４ｍの未完のミナレットと共に白い石柱の柱が並び、その前面には 1973 年に完成されフランスからの独立を勝ち取ったムハンマド５世の霊廟は、天井のステンドグラスの様な金色のランプと白い石棺が目をひく、霊廟の入り口に立つ真紅の衣装の衛兵は笑顔でカメラに収まってくれた。

次に、モロッコに現存する最大のローマ遺跡（1997 年に世界遺産に登録された）の**ヴォルビリスの古代遺跡**に向かう。ムーレイ･イドリスの丘の麓の約 40ｈａという広大な敷地に、2000 年前の凱旋門が残り、建物の床のモザイクタイルが鮮やかな色で当時の生活を描いている。ここは、トルコのエフェソスの都市遺跡によく似た光景、紀元 40 年以後にローマの属領となって繁栄していた頃は２万人の人々が栄華な生活をしていたことがうかがわれる。凱旋門から続く大通りや公共広場、オリーブ油の搾取所、浴場、水洗トイレなど当時の生活を物語っていた。

昼食のフェズのレストランでは美味しい鱒の料理が出された。モロッコは大西洋と地中海に面する漁業も盛んな国で、日本への輸出の６割はタコで、日本のたこ焼きのタコはすべてモロッコ産と知る。

その後、フェズの観光に繰り出す。**フェズ**は、モロッコでの最初のイスラム王朝イドリス朝（788～926 年）の首都として、イドリス２世によってつくられ、イスラム文化の中心地として栄えた。当時に出来たこの旧市街（メディナ）フェズ・エル・バリは世界遺産に登録されており、千年以上の歴史を刻む狭く暗い路地は、まるで迷路のように入り組み、とても現地ガイドなしには歩けるものではない。現在、行政の中心は、フランスの保護国の時に造られた新市街に移っているが、人口 50 万人の半分はこの二つのメデイナに住んでいる。旧市街の入口にあるブ―・ジュルード門は幾何学模様に彫刻され、前面が青色、後ろ面が緑色のタイルで彩られている。狭い道は起伏に富み、登ったり下ったり曲がったり、人々がやっとすれ違える程度の幅、昼でさえ暗いトンネルは太陽の方向さえ分からない、同じ場所をくるくる回っているような錯覚を覚える。フェズのメデイナは、まさに世界一の迷路といえる。この一時間余りの散策は「前の人を見失なわないよう」「スリに気をつけなくては」と神経も足腰もかなり疲れたが広場に戻りホッとした。途中、タンネリ（なめし皮染色職人街）に寄る。円い染色桶が並ぶ作業場では中世そのままの皮を染める手作業を見ることが出来、

日本でも人気のパブ―シュ（革製サンダル）やカバン、金属細工のインテリア用品、カラフルなグラス・陶器などを買い求める人も多い。

ホテルでの夕食後、初参加の方を歓迎し、みんなで一つの部屋に集う。先ずは、モロッコビールのＦｌａｇで乾杯、これまでの旅の話や明日からの旅の期待など、常には話題にもならないことで、笑い合ったりして、ひと時を楽しんだ。（モロッコのビールＦｌａｇはシンプルな紺と赤のデザインの缶、スーパーでは 350m160～70 円、レストランでは 500 円）

第４日＜二月三日（日）晴れ＞

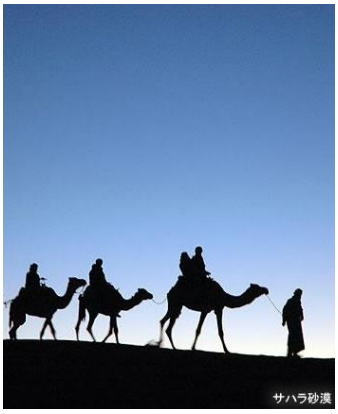
今日は、昨日に引き続きフェズの観光。先ずはフェズ・エル・ジェデイト地区にある王宮を訪ねる。正面の青い色調の美しい正門を見てから旧ユダヤ人居住区メラ―に回る。木製のバルコニーや格子窓がある独特の二階建ての家が続く。ここには、ユダヤ人経営の金銀細工の店もあるが、イスラエル建国に伴い多くはここを去り、今はムスリム住民が大半をしめる。その後、短い迷路のような商店街を見て回る。

その後アトラス山脈を越えてサハラ砂漠に向かう途中、標高 1650mの高原の避暑地**イフレン**に立ち寄る。フランスの植民地だったころ保養地として建設され、独立後は国王や政府要人の別荘地となったものでヨーロッパ風の静かなたたずまいの美しい街であった。

その後ミデルトに向かい、途中カスバ（砦）風レストランで昼食後、いよいよ荒々しいアトラス山脈の山岳地帯に入る。高い山には白い雪が積もり近くの黒い大地と対比をなし美しいアングル。途中ズイズ渓谷の赤い岩肌の大渓谷のパノラマを眼下に収める。観光客を目当てに、近くのオアシスで採取したナツメヤシの砂糖漬けを売る人、こんな高い所で観光バスを待ち、商売をするベルベル人に感心した。

夕方遅く約 450 ㎞を８時間かけて、サハラ砂漠の玄関口**エルフード**の街のサラーム・ホテルに着く。世界中からの観光客が集まるこのホテルは、設備も充実し、中庭とプールサイドには肌寒い中なのに紅のブーゲンビリアが咲き乱れてとても不思議な景色。夕食後、希望者は車で「星空観賞」へ。真っ暗闇の中こんなに沢山あるものかと、さんざめく星空に感動。

第５日目＜２月４日　（月）　晴れ＞



いよいよ旅の最大の魅力の一つ、**サハラ砂漠・メルズ―カ大砂丘**観光に出発。サハラ砂漠はアフリカ北部にあり、アフリカ大陸のほぼ３分の１の広さを持っているが、約 70%は礫砂漠で、残りが砂砂漠や岩石砂漠である。メルズ―カ大砂丘は典型的な砂砂漠で、赤い細かい砂からできている。ガイドの長澤さんが、「くれぐれも電気製品は砂漠に落とさないように、砂が内部に入り一発で使えなくなる」との注意がある。

午前５時１５分に、現地の人が運転する４輪駆動のランドローバーに分乗し、100 キロ近いスピードで約１時間走る。まさに道なき道の砂漠のサハリレースを体験するようだ。ラクダステーションにはかなりの数のラクダが待機していたが、それに一人ずつ乗せてくれる。サハラのラクダは一瘤ラクダで、その上に粗末な鞍とハンドルが取り付けてある。少し小柄な様に見えたが乗ってみると視点はかなり高い。ハンドルから手を離してのカメラの操作は、やや難しい技だが見事にやっている人もいる。日の出前

は特に寒いのだが、その寒さは相当の物で、じっとしていられないくらい。ラクダの御者のベルベル人が自分のガウンを着せてくれたり、ターバンを頭に巻いてくれた。砂漠の民の酋長の様な扮装で、早速記念写真。

東方から徐々に陽が昇り始める。信じられないほどの光の神秘が身を包む。人々は太陽に向かい太陽神を信じるように思わず手をあわせたくなる。朝日は砂丘の上を照らし砂丘は各々の形を美しく浮かび上がらせる。ラクダや人の影が細く長く砂原に伸び、細やかな砂は風紋を描き、打ち寄せる波のように砂のひだを寄せる。何という素晴らしい光景か、この神より与えられた雄大な自然の贈り物、その中に自分がいることを疑いながら感激の他はない。この日、砂漠の日の出を見る日本人のツアーが我々を含めて３組もあり、ますます日本人が増えるのではないかと思った。（現在日本人観光客は年２万５千人余）その後ベルベル人のテントに立ち寄り暖かいミントティーを頂く。

ホテルに戻り、朝食後、カスバ街道をドライブしワレザザードに向かう。

カスバ街道は、サハラ砂漠の南側とアトラス山脈の北側とを結ぶ重要な通商路だったという。当時はラクダのキャラバン隊が通った道を今は大型観光バスが走っている。

昼食は**トドラ峡谷**のレストランでタジン料理を頂く。トドラ渓谷は、両岸に 300mもの切り立った崖があり、ロッククライマーがその壁を登ることで有名。暫し、岸壁の間を散策、トドラ川の水はアトラス山脈の雪解け水で、とても冷たかった。観光客を目当てに土産物屋が路上に並びスカーフとかラクダの置物などを売っている。イスラムの世界では女性が他人に顔を見せることは難しいのに、着飾った娘が「写真を撮らないか」と誘ってくる。

カスバ街道は、延々と続く薄紅と白のアーモンドの花盛り、日本の桜満開の春を感じさせる。モロッコの国花のバラ、ジャカランダ、ハイビスカス、ブーゲンビリア等、年中色とりどりの花が咲き乱れている。いたるところで放牧の牛や羊の群れを見つつ、途中のカスバでダマスクローズの「ばらの香水」の店に立ち寄る。夕方太陽が地平線に沈む時「この太陽は、今朝昇るのを見たあの太陽だ」と感慨もひとしお。

第６日＜２月５日(火)　晴れ＞

サハラ砂漠の入り口、**ワレザザート**とは「静かな街」という意味で居住者の８割以上はベルベル人とのこと。1920 年代にサハラ砂漠の最前線基地として建設された街で今はモロッコ軍が駐屯している。市内にある映画のスタジオを外から見学、かつてデビット・リーン監督がこの近郊で「アラビアのロレンス」を撮って以来、この地域はいくつもの映画の舞台として使われ、砂漠への憧れを抱く人たちの興味を高めてきた。

その後、「アラビアのロレンス」のロケに使われた**テフルトゥート**のカスバを一望する店に立ち寄る。龍舌蘭（この地域の山地で植栽されている）の繊維で織られたマフラーや絨毯等を売っていた。今は、ホテルやレストランとして使われているカスバだが、「あのカスバを別荘として買ったらどうだろう」

という人もいたが、現地ガイドのマタ二さんは「土のレンガの家はメンテナンスが大変ですよ、だんだん崩れてきますから」と言っており、街道沿いの家も崩れて元の土に戻り始めていたことを想い出した。

その後、世界遺産**「アイト・ベン・ハッドウ」**に行く。ここは、日干しレンガ造りの「クサル（要塞化された村）」の一つで特別な史実があるわけではない。塩分の強い小川のほとりの丘を利用して立体的に造られているこの村は、巨大な門と高い城壁、銃眼が配置された高い塔（穀物倉と見張り台）等迫力ある空間といっていい。現在もここに住んでいるベルベル人は五～六家族だけで、大半は川の対岸に造られた新しい村に移転したという。昼食は近くのレストランでのケバブ（焼き肉料理）を頂く。ツアーに同行した若者に「どうしてモロッコを選ばれましたか」と聞くと、「なんとなくロマンチックだから、砂漠とラクダが好きだから」との答えだった。

その後マラケシュへ約五時間のバスの旅。巨大な「日光のいろは坂の様な」（ガイドのマタ二さんの表現）曲がりくねった山道を延々と登り、山肌に張り付くようなベルベル人の村をいくつも通り過ぎ、最高地点テイシュカは標高２２６０ｍ、そこからマラケシュに向けて下る。途中、休憩でバスが止まると何処からともなく、きれいな石を持った人が近づいてくる。

その後、世界的にも極光を浴びているアルガンオイルの専門店に寄る。**アルガンオイル**とは「高濃度のオレイン酸とビタミンＥを含有するモロッコ南部でしか産出されない貴重な天然オイル」で「小さな皺なら消える」と日本でも大変人気のある美容オイルである。アルガンの固い実を石で割り真ん中の核を石臼で曳いて抽出するこのオイルの採取は大変な労力が必要で、政府は地域の女性たちの自立のためにも奨励、助成している事業である。またこの木の生命力に着目して砂漠の緑化にも役立てようとしている。

マラケシュ到着後、一旦ホテルにチェックインしてからジャマ・エル・フナ広場のレストランでの夕食。ここで初めてモロッコの音楽（太鼓、笛、ウードウ）による歓迎の夕食。その楽団に、自分が広場で買った太鼓を持って上手に合奏をする人もいた。

第７日目＜２月６日（水　）晴れ　＞

いよいよ旅も最終盤となった。**マラケシュ**は「赤い街」「通り過ぎる」という意味であり、人口 66 万の第３の都市、あらゆる土地から、あらゆる物が集まってくるフェズに次いで２番目に古い街で、長い間、政治・交易・文化の中心であった。北アフリカ最大の規模を誇るマラケシュの**メディナ**は今も人々をひきつけずにはおかない。広場では蛇使いや猿回しなどがパフォーマンスを繰り広げ屋台が立ち並ぶ。誰でもこのカオス（天地創造前の世界の状態、混沌）のよ

うなパワーが生み出すエネルギーには圧倒されてしまう。

ホテルで朝食後まずはマラケシュのシンボルとしての**クトウビア**に向かう。この美しいミナレット（塔）はムワッヒド王朝の創始者によって着手され、その息子たちによって完成されたもの。早朝から観光客で賑わい民俗衣装に着飾ったベルベル人や水売り、沢山のコウノトリが高い所に巣をつくっていた。モロッコにはいたる所に猫がいて人間と猫は共存している。

そして次に訪ねた４人の妃たちのために建てられたという**バイア宮殿**の入口では、猫の尿の臭いに閉口する。広大な庭園と豪華な妃たちの個室の壁面には鮮やかなタイル、天井には細密画が描かれており贅を尽くした芸術作品には目を奪われるばかり。ここではフランス人の観光客がとても多かったがモロッコへの観光客のトップはフランス、スペイン、ドイツ、イタリアと続き時差も少ないヨーロッパからが多いという。そして世界遺産にも登録されたメデイナ・スークを訪ねる。スークではあらゆるものがところ狭しと並べられ、衣料品、装身具、スリッパ、皮製品、香辛料、木彫り品、陶器、カーペットなどが売られている。

ここでの値段の交渉が面白い。日本人は「これはいくらですか」と切り出すわけだが、モロッコでは売り手が「ハウ　マッチ」と聞いて来る。要するに「貴方はいくらなら買うのか」というわけだ。向こうは最初に相場の大体５倍ぐらいの値段を言って、「ハウ　マッチ」と交渉に入る。定価というものはここにはない。

夕方、**カサブランカ**に到着、ここは人口 365 万人のモロッコ最大の都市、大西洋に面した美しい街だった。到着後まず向かったのは**ハッサン２世モスク**。1993 年に完成した世界の４大モスクでモロッコ最大のモスク、大西洋に面した９ヘクタールの敷地にモスク内が２ヘクタール、全敷地に８万人、内部に２万５千人が収容可能、ミナレットは 200mの世界最大級の高さを誇り、その尖塔の３つの玉は厳正、来世、神の世を、またはイスラム教、キリスト教、ユダヤ教を現しているという。モロッコ全土から 3300 人もの職人を集め海、太陽、風をモチーフにした内装が全て手作りで精緻に描かれている。地下には巨大なハマム（公衆浴場）やトイレがあり世界各地からの巡礼者が心おきなくお祈りが出来るよう施設が整っている。しかし、一方では国民の寄付金と税金で膨大な予算を費やしたことへの批判もある。

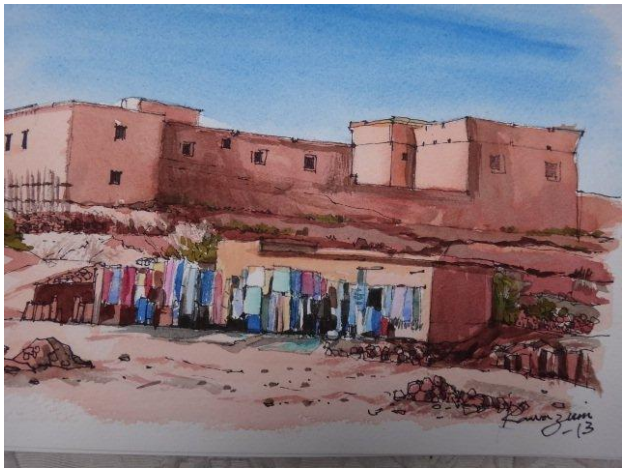
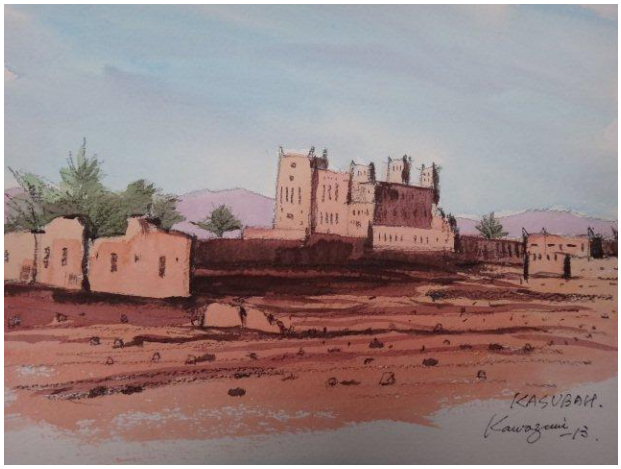
その後、映画「カサブランカ」の舞台となった**「リックのバー」**を外から見て写真に収める。

そして、ホテルにチェク・インしたが、このホテルの部屋番号も「イスラム社会では、奇数と偶数は分かれて配置されています」とのことで、暫し探している人もいた。

希望者はホテルの近くのスーパーに寄り買い物をしたが、イスラム教が禁じているアルコールも公然と売っているのには驚いた。モロッコ最後の夕食はホテルから近いレストランでの魚料理とシーフードサラダだった。

第８日、第９日目＜２月７日（木）、８日（金）晴れ　＞

いよいよ 20 数時間の長旅で日本へ帰る時がきた。モーニングコールが午前５時半、７時にバスでカサブランカのモハメッド５世空港に向かう。

帰りも同じカタール航空でチェニスを経由してカタールのドーハに行き、成田空港に着いたのは翌日の午後５時で偏西風に乗った約１７時間の飛行であった。帰国後、友達に聞いた話では、私たちが経由したチェニス空港は、翌日デモがあり閉鎖されたらしいとのことで、間一髪だったかもしれない。少しハードな日程だったが、何事もなく皆さん無事で旅を終えることが出来たことに感謝。成田空港での「おかえりなさい」の言葉には、いつもながらホッとする。

以上